

# 国語科における音読授業づくり

## ～複式学級における問い・みとりを大切にしたい国語科教育～

中村 正雄

複式学級の性質上、2学年同時に学習を進めていく必要がある。その中で教師がずっとついていくことができない複式だからこそ、子ども1人1人のみとりが重要になってくるのではないかと考えた。また、国語科の学習において子どもたちが思考のズレを感じ、問いが生まれることによってより学習に向かう姿が見られるのではないかと考え、研究をした。

キーワード：並行読書、ズレ、みとり、複式、斎藤隆介、新美南吉

### 1. 研究目的

本校の研究主題「問い続け学び続ける子どもたち」に迫っていけるように子どもたち1人1人を見とりながら学習を進めていく。子どもたちが学習課題に興味を持ち、友だちと意見を交流する中で新しい見方や国語科教材のおもしろさに気付いていけるように単元を貫く言語活動を位置づけることにした。

国語科の学習では、ワークシート等から子どもたちの考えを教師がみとり、授業の中で子どもたちが主体的に学習できるような授業展開を考えていく。

### 2. 研究方法

本研究では、第3学年「モチモチの木」、第4学年「ごんぎつね」の実践について記述する。「モチモチの木」は夜にトイレにも行けない弱虫な主人公が、じさまを助けるために夜道を走って医者を呼びに行く話である。3年生にとっては自分と重ねながら読み進めることが出来る教材である。「ごんぎつね」はごんというきつねが自分の犯してしまった過ちに対して人間の兵十につぐないをしていく話である。ごんの様子や行動の変化は兵十に対する思いの強さが表れている。

まず、複式学級において同じ物語教材を取り扱うことにした。3年生は斎藤隆介、4年生は新美南吉の作品に触れていくことで、互いのお気に入りの物語を自然に交流する姿が見られると考えたからである。

本研究では、複式学級における子どもたちの問いを生かし、学習を進めていく。毎時間の子どもの考えから思考のズレを取り上げることで、「なぜだろう」「どうしてだろう」といった問いが生まれる。問いが生まれることで主人公の心情に迫る話し合いが展開され、深い学びにつながっていく。

### 3. 付けたい力の明確化

学習指導要領の指導事項に沿いながら子どもたち

をみとり、発達段階に応じた指導を設定した。以下は3・4年生複式国語科における「モチモチの木」と「ごんぎつね」の単元目標である。

3年生
◎登場人物の会話や行動、情景描写から人物の気持ちや人柄を捉えて読むことができる。
○文章を読んで、考えたことを発表し合い、1人1人の感じ方の違いに気づくことができる。
・目的に応じて、色々な本や文章を選んで読むことができる。
4年生
◎場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むことができる。
○文章を読んで、考えたことを発表し合い、1人1人の感じ方の違いに気づくことができる。
・目的に応じて、色々な本や文章を選んで読むことができる。

### 4. 1. 単元を貫く言語活動

単元目標を達成するための言語活動として「わたしのお気に入りの本を紹介する」という活動を位置づけ学習していくことにした。3年生は斎藤隆介作品を読み進め、4年生は新美南吉作品を読み進めていくことにした。並行読書に関する本は教師が事前に本を選定した。

どちらの学年も、3次では日記を通して自分のお気に入りの作品を紹介するブックトークをする。ブックトークでは、「セリフ・行動・周りの様子」の3つの視点で読み取ったことを生かす。登場人物になりきって自分が最も気に入った1つの場面を日記として書き、異学年で紹介する。2次でも豆太日記、ごん日記として3つの視点を使うことで、学習したことを3次で発揮

し、叙述に着目させることで何故そう思ったのかしつかりと自分の意見を持たせた。そして、日記や根拠となる叙述を交流することで新しい気付きやさらなる探究心につなげていった。そうすることで関連する本を「読んでみたい」「もっと読みたい」と思える子どもたちの姿を目指して取り組んだ。



図1 並行読書の様子

#### 4. 2. ズレを生む活動

学習を進めていく中で、子どもたちの考えに違いが見えてくる場面がある。その違いを教師がしっかりと把握し、子どもたちに考えさせることが重要である。

3年生の「モチモチの木」では、初発の感想を交流するときに子どもたちの考えのズレから1つの問いが生まれた。

さとる：お話しを通して豆太は強くなったんじゃないかな。  
 みかこ：豆太は強くなったというよりはちょっと勇気があるんじゃないかな。  
 けんと：でも、最後には「じさまあ」って言ってしょんべんに行けないことが分かる。豆太は強いんだけど弱いところもある。



図2 初発の感想

感想では、豆太の人物像に子どもたちは大きな魅力を感じていた。それは、豆太が本当に心が強い人物なのか、または弱さの中にも少しの勇気がある人物なのかということであった。思考のズレから豆太という人物がどんな人物なのか本当に知りたいという気持ちが表れていた。よって豆太の心情を豆太日記として書かためていくことにした。

授業の導入部分で、それぞれの登場人物になりきり

心に残ったところを〇〇日記として紹介し合う。日記を紹介することで生まれる、友達との考え方の違いや思考のズレを取り上げていくことが子どもたちの学習意欲につながる。日記の書き方として①各場面での1番心が動いたところを教科書から抜き出す。②主人公になってその場面の日記を書くという形式にした。1番心が動いたところは日記の根拠となる教科書の叙述である。授業の前には1人ずつ短冊に書いて視覚化を図った。こうすることで全員が1番心に残ったところと〇〇日記を照らし合わせながら考えを共有化することができる。上段を短冊、下段を日記という形式をつくっておくことで2学年が司会・記録を中心に自分たちで学習を進めていくことが出来た。

次は第5時の3・4年生の学習の様子である。

3年生は、豆太の人物像に迫った。導入で日記を交流したときにある子が、友だちとの日記にズレがあることに気付いた。それは豆太が（勇気を出して）しょんべんに行きたいと思っているのではなく、行けないというものであった。本当に夜、豆太はしょんべんにいけないのか、またそれはどうしてなのか課題として取り上げ、話し合うことができた。友だちとの感じ方の違いに気づき、問いが生まれた瞬間であった。

4年生は、日記からいたずらしてやろうという日記とうなぎがおいしそうだと思っている日記のズレに気がついた。そこからごんは、うなぎを食べたいと思っていたのかという問いが生まれ、ごんがどんなきつねなのか話し合った。話し合いの中で、ごんのやっていることはただのいたずらではなく、酷いものだ確認した。また、兵十に対して、うなぎを食べたいというよいも、隙をついていたずらしようという気持ちが強いという意見が出た。日記を全員で共有することにより、ごんの行ったいたずらだが、自分が思っている以上に大きな出来事であることに気付くことができた。また、授業の終わりに日記を赤で直したり、付け加えたりした。そうすることでより登場人物の心情について考える姿を見ることができた。ごんが「うなぎを食べたい」と日記を書いた子が日記を振り返った後には、ごんが兵十にいたずらをして困らせようとする日記に変化していた。

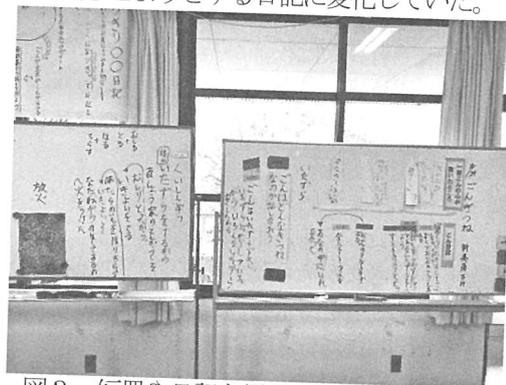


図3 短冊や日記を用いての視覚化

#### 4. 4. 本時における子どもたちの学び

ここから第8時の学習について記述する。

3年生

8時【どうして豆太は医者様を呼びに行くことができたのか話し合おう】

・医者様を呼びに行った豆太の様子を話し合う。

★医者様を呼びに行った豆太について日記を書く。

まず、前時に書いた豆太日記をみとった。するとさとし、りこ、けんやの日記に違いが表れた。

さとし	じさまあ、死なないで、ぼくが助けるから。はやく！！はやく、じさまー死なないでー。医者様を早くよぶぞー！！いたい！いたい！きつとなおせる、まっててじさまー。
りこ	大好きなじさまが死んじゃったら悲しいよー。ぼくもモチモチの木に灯がついているところを見れた。きれいだなー。 <u>なぜぼくも見れたんだろー。</u>
けんや	いたいようーいたいようー。早く医者様をよばなくっちゃ。あと、医者様をよんでじさまのはらいたを治してもらおう。

日記をみているとじさまのことを心配する記述があった。さとしやけんやの日記には豆太の必死さが伝わる。じさまを助けるために行動する様子である。しかし、今までの日記から臆病な豆太は夜にしよんべんも1人で行けないことをおさえていた。子どもたちはどうして豆太が灯の灯ったモチモチの木を見ることが出来たのか疑問を持った。以下は授業の様子である。

教師：一度前の日記も紹介してあげて、みんなよく聞いてね。

ゆうき：3の場面は灯がついたところを見たいと思っていた。4の場面は見る事が出来た。

教師：ゆうき君の言ったこと分かった？（灯の灯ったモチモチの木）見る事が出来た？

みんな：見る事が出来た。

ななみ：でも豆太は夜怖かったんじゃない？何故見る事ができたのかなあ。

教師：じゃあ、なぜ見る事が出来たのか話し合いましよう。

まさき：じさまが病気の時、助けに行った。じさまを助けたから見られた。

さとし：じさまが死にそうやから。（医者様を）呼んだときにたまたま見られた。

まさき：質問です。なんでたまたま？

日記について交流する中で、夜のモチモチの木を怖がっていた豆太が医者様を呼びに行くことが出

来た理由に子どもたちは疑問を感じた。よってめあてを「どうして豆太は灯のともったモチモチの木を見ることができたのか話し合おう」とした。日記を見る場面ごとに書かせることでその連続性がズレを生み出し、子どもたちの問いにつながった瞬間であった。

また、友だちとの日記の中からもズレが生まれた瞬間があった。それは、りこの日記にある、モチモチの木がきれいだと豆太が感じていることについてであった。この記述について本時までには教師がみとり子どもたちから意見が出なかった場合、教師から問いを投げかけるように考えていた。

教師：りこちゃんの日記とみんなの日記の違いについてはどうかな。

さとし：モチモチの木がきれいとあるけれども・・・

ななみ：きれいと考えている余裕がなかったと思う。

教師：何でそう思ったの？

ななみ：豆太はじさまを助けたいとがんばったから。

教師：頑張ったって分かるところはありますか？

けんや：医者のところまで降りないと行けないから、血がでて走ったから。

ゆうき：なきなき走った。

ひな：頑張って走ったのは本当にじさまが好きで、死んだらあかんと思ったから。血が出ても死ぬよりましだから。

話し合いの中では、豆太がじさまのために必死で医者様を呼びに行った様子が意見として出てきた。そこから「豆太が医者様の腰を蹴った。それは、じさまが死んでしまうのが怖かったから」「とにかくじさまが心配だった。だから豆太はなきなき走った。」という考えにつながっていった。確かにモチモチの木はきれいだが、それ以上にじさまのことが心配であること読み取ることができた。



図4 灯の灯ったモチモチの木を見ることができた理由について話し合いをする

#### 4. 5. 複式学級における国語科の学び合い

第2次で3つの視点を使って日記を交流し、登場人物の心情に迫った後に、自分のお気に入りの本について日記を書いた。1次の段階で日記を書いて紹介する相手を子どもたちに訊いてみたところ、4年生は3年生に、3年生は4年生に紹介したいという意見が出た。ただし、その時までお互いに秘密にしたいという事であった。子どもたちは互いに紹介することを楽しみにしている様子であった。複式学級において他学年と交流できることは大きなメリットであると考えられる。相手意識をしっかりと持つことで学習意欲が高まるからである。また、お互いの学習を伝え合うことで大きな刺激となる。今回は、同じ教室で学習する仲間だからこそ紹介したいという気持ちが強かったのだと考える。

第3次では、お互いに日記を用いてお気に入りの本を紹介した後に感想を交流した。すると子どもたちから自然と気になったところや面白かったところ、本を読んでみたいという感想が出た。また、全員の紹介した本について必ず友だちが感想を伝えることができた。その後には、互いの紹介した本を手にとって読む姿が見られた。紹介する活動を通して斎藤隆介、新美南吉の作品により多く触れることが出来たように思う。



図5 3年生と4年生でお気に入りの本を紹介する

#### 5. 成果と課題

本研究の成果としては以下の点がある。

まず、〇〇日記として子どもたちの考えを事前にみとめることは授業を行う上で重要な役割を果たした。事前に日記を把握しておくことで子どもたちの考えの違いや読み取りの深さを知ることができ、具体的な教師の出や発問を精選することが出来た。また、子どもたちの意見を短冊や前に板書することで全員が共有を図ることができ、思考のズレから問いが生まれたのは、主体的な学びにつながったと考える。だが、単に板書するのではなく、みとりから教師の発問を精選することが非常に重要だと感じた。

次に導入部分で日記を交流することで、感じ方や考え方の違い（ズレ）を生み出すことができ、「どうして豆太は灯のともったモチモチの木を見ることができたのか。」と子どもたちの興味・関心に沿ったためあてを設定することが出来た。そうすることで豆太のじさまに対する思いの強さや必死に医者様を呼びに行く様子について主体的に話し合うことができたのは大きな成果である。今までの国語科の学習と比べても発言や板書の量も多くなり、振り返り時には話し合ったことを用いてより詳しく日記を書くことが出来ていた。

もう一つは、日記を続けて書いていくことでその時間だけでなく、単元を通して違いや変化に気付くことが出来たことである。単元を貫く言語活動として設定した途上人物になりきった日記を書く活動であるが、書いた物を振り返ることで豆太の様子や行動の変化にも気付くことが出来た。

課題としては以下の点がある。

まず、日記をみとり、視覚化したからといって必ずしもズレや疑問が生まれることではないということである。互いの考えを様々な視点から見ることが大切になる。場合によっては、日記が提示されるだけで終わってしまうことがある。だからこそ互いの考えに注目し、友だちの考えについて自分の思ったことを伝えることが出来る学級風土作りが必要であると感じた。

次に主体に取り組むための問いにつながる日記が、主人公になりきって書くということは子どもたちにとって難しかったと考える。児童の実態としてあまり書くことに慣れていないこともあり、もっと書きやすいように手紙というような形の方が取り組みやすかったのではないかと考えた。

子どもたちの思考をみとり、それをもとに授業を展開することや子どもたちの実態にあった言語活動の設定することは大切であると感じた。特に複式学級の場合、直接指導できない間接の時に子どもたちが話し合い、付けたい力を身につけられるようにするためにも1人1人の考えをふまえた授業展開を念頭に置いておきたい。今後は、国語科における複式学級の主体的な学びをどのように展開することができるか研究していきたい。

#### 参考文献

- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説 国語編 東洋館出版社
- 水戸部修治 (2014) 小学校国語科学習指導案パーフェクトガイド3・4年 明治図書
- 白石範孝 (2016) 「モチモチの木」全時間・全板書 東洋館出版